

カウンセラーに対する知識とイメージの検討

—身だしなみや外見に着目して—

清水麻莉子¹⁾ 森田美弥子²⁾

問題と目的

人は他者と関わりながら生きていく社会的な存在である。われわれは他者と新たな関係を構築する際、他者に関するさまざまな情報をもとに、他者の性格を判断し、行動を予測している。このような他者についての諸側面を推測するわれわれの認知的な枠組みは対人認知と称されている。

対人認知の重要な側面の1つに特定の他者についての全体的印象を形成する過程である印象形成がある。印象形成に関する研究はAsch (1946) に始まり、印象形成にはすべての刺激が均等な重みづけを持つのではなく、印象の規定因となる中心的特性とそうでない周辺の特性が存在すること、初期情報が印象の全体像の方向づけを決定し、後続情報の意味を変容させる初頭効果があることが導き出されている。また、Secord (1958) や Fiske & Cox (1979) により、顔などの外見的特徴が印象形成に大きな影響を与えていることが示されている。このように、われわれは他者の外見的特徴から多くの情報を受け取って印象を形成している。

他者の外見的特徴という情報から受け取られる美しさや魅力は身体的魅力と称されている。われわれは自分自身の身体的魅力の高さに関わらず、身体的魅力が高い他者を好意的に評定する (高木, 2001)。特に、対人関係の初期段階では、相手の容貌、スタイル、服装などの外見的特徴による身体的魅力が関係維持に影響する (安藤・大坊・池田, 1995; Levinger, 1980)。

さて、近年、うつ病、認知症、児童虐待、不登校、自死や過労死、被災者支援など、さまざまな心の問題への対応が医療、福祉、教育、産業、司法といった多くの領域で求められている。そのため、心の問題に対応する専門家としてカウンセラーが多くの相談機関に配置される

ようになり、専門的援助への認知度や関心度は高まっている。しかし、野村・五十嵐 (2004) は援助資源を利用するのが望ましい場合でも、利用されないことが圧倒的に多いことを指摘しており、現在、援助資源は十分に活用されていないと言える。

心の問題を抱えた人々が適切に援助を求めることは援助要請行動として研究されており、わが国では援助要請に関連する変数の検討が行われている。木村 (2007) によると、学生相談に対する援助要請に関連する変数として先行研究で数多く検討されているものに、イメージに関する変数、ニーズに関する変数、認知・意識に関する変数の3つがある。これまで、イメージに関する変数については、相談機関についてのイメージ (真覚・中村, 1993)、学生相談室という名称から連想するイメージ (荻原・吉川・山田, 1995) など、相談機関に対するイメージが検討されている。そして、相談機関に対するイメージの中で、ネガティブなイメージは援助要請行動を抑制することが示されている (森田, 1997)。また、伊藤・松田・加藤 (2015) はカウンセリングに対する印象を明らかにすることで、専門家への援助要請行動を促進する要因と回避する要因を明らかにしている。このように、相談機関に対するイメージや援助要請行動との関連が検討されているものの、専門家に対するイメージは明らかでない。

そこで、本研究ではカウンセラーという職業に関する知識およびカウンセラーに対するイメージを検討することを目的とする。そして、イメージについては、印象形成に外見的特徴が影響するという先行研究の知見から、特に、カウンセラーの身だしなみや外見のイメージに着目する。

なお、本研究ではカウンセラーと臨床心理士を併記する。臨床心理士とは、文部科学省の認可する公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会によって認可交付される資格であり、1988年に第1号が交付され、2016年4月1日現在で総数31,291名が認定されている (公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会, 2016)。カウンセラーは

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 森田美弥子教授)

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

心の問題に対応する専門家であるが、日本の心の専門家の中で、規模の大きな資格の1つが臨床心理士であるため（森田・金子，2014），本研究ではカウンセラーと臨床心理士を同義として用いる。

方法

調査参加者

首都圏の大学生46名（男性19名，女性27名）を対象とした。対象者の平均年齢は20.37歳（ $SD = 1.36$ ）であった。なお，本研究ではカウンセラーに対する一般的なイメージを調査することを目的としているため，カウンセリングについての学問的知識が反映される可能性を考え，心理学を専攻していない大学生を対象とした。

調査時期

2015年5，6月に実施した。

調査手続き

自由記述式の質問を用いて，カウンセラー（臨床心理士）に対するイメージについて調査した。はじめに，性別と年齢に回答を求めた。次に，(1)“あなたはカウンセラー（臨床心理士）という職業を知っていますか。知っている場合，どのようなことを知っていますか。”に対して“知っている”または“知らない”の選択を求めた後，カウンセラー（臨床心理士）という職業についての知識を回答するように求めた。さらに，(2)“あなたはカウンセラー（臨床心理士）に対してどのようなイメージを持っていますか。”，(3)“あなたはカウンセラー（臨床心理士）の身だしなみや外見などについて，どのようなイメージを持っていますか。”に対して，思い浮かんだ内容を自由に記述するように求めた。最後に，(4)“あなたはカウンセリング（心理面接）を受けたことがありますか。”に対して“ある”または“ない”の選択を求めた。

調査は無記名式で実施され，回答は任意であること，自由に取やめることが可能であること等をフェイスシートに明記した。

分析方法

自由記述式の質問に対する回答については，心理学専攻の大学院生3名でKJ法（川喜田，1967）を実施した。

各質問に対する記述内容をサブカテゴリー（以下，[]により示す）にまとめ，同種の内容とされるサブカテゴリーをカテゴリー（以下，【 】により示す）とした。さらに，大きなカテゴリーに集約されるものは大カテゴリー（以下，≪ ≫により示す）として分類を行ったが，

上位カテゴリーに集約されないものについてはサブカテゴリーをそのまま採用した。なお，具体的記述は「」で示した。

結果

大学生が持つカウンセラーに関する知識

カウンセラーという職業に関する知識については，“知っている”が42名（91.3%），“知らない”が3名（6.5%），未回答が1名（2.2%）であった。自由記述の総回答数は52であった。KJ法の結果をTable 1に示した。

大カテゴリーとして≪カウンセリング≫（88.5%）が抽出され，回答の大部分を占める結果となった。カテゴリーは計4カテゴリーが抽出され，【働きかけ】（30.8%），【広い領域】（23.1%），【きく】（17.3%）の順に多く，【共にある】（5.8%）は少ないというものであった。【働きかけ】については[心のケア]，[精神的サポート]，[アドバイス]，[心の病を治す]，[負担を減らす]，[なぐさめる]，[傾聴によるラポール形成]の7サブカテゴリー，【広い領域】については[学校]，[医療]の2サブカテゴリー，【きく】については[悩みをきく・相談にのる]，[話をきく]の2サブカテゴリー，【共にある】については[心によりそう]，[解決に向けて一緒に考える]の2サブカテゴリーが抽出された。上位カテゴリーに分類されなかったサブカテゴリーは[催眠をかける]，[守秘義務]，[わからない]であった。

大学生が持つカウンセラーに対するイメージ

カウンセラーに対するイメージについての自由記述の総回答数は94であった。KJ法の結果をTable 2に示した。なお，自由記述の回答の中で2つの記述内容に分類できると考えられる記述が存在したため，KJ法による分類の際は総回答数を95として分類を行った。

大カテゴリーとして≪カウンセリング≫（33.7%）が抽出された。カテゴリーは計11カテゴリーが抽出され，≪カウンセリング≫に含まれるカテゴリーは【きく】（20.0%），【共にある】（4.2%），【働きかけ】（4.2%）の3カテゴリーであった。大カテゴリーに分類されなかったカテゴリーは【温和】（25.3%）が極めて多く，【心遣い】（5.3%），【職務上の否定的側面】（5.3%），【属性】（4.2%），【職業上の位置づけ】（3.2%），【よくみる】（3.2%），【人付き合い】（3.2%），【価値がある】（2.1%）が同程度であった。≪カウンセリング≫に含まれるカテゴリーに関して，【きく】については[話をきく]，[聞き上手]，[悩みをきく・相談にのる]，[傾聴]の4サブカテゴリー，【共にある】については[心によりそう]，[味方になる]，[向き合う]の3サブカテゴリー，【働きかけ】については[精

Table 1 カウンセラーに関する知識の分類結果 (n= 52)

大カテゴリー	記述数 (%)	カテゴリー	記述数 (%)	サブカテゴリー	記述数 (%)
カウンセリング	46 (88.5)	働きかけ	16 (30.8)	心のケア	6 (11.5)
				精神的サポート	3 (5.8)
				アドバイス	3 (5.8)
				心の病を治す	1 (1.9)
				負担を減らす	1 (1.9)
				なぐさめる	1 (1.9)
		広い領域	12 (23.1)	学校	6 (11.5)
				医療	2 (3.8)
		きく	9 (17.3)	悩みをきく・相談にのる	6 (11.5)
				話をきく	3 (5.8)
		共にある	3 (5.8)	心によりそう	2 (3.8)
				解決に向けて一緒に考える	1 (1.9)
				催眠をかける	1 (1.9)
				守秘義務	1 (1.9)
				わからない	4 (7.7)

神的サポート], [心のケア], [アドバイス] の3サブカテゴリーが抽出された。また, <<カウンセリング>>の中で上位カテゴリーに分類されなかったサブカテゴリーは [少人数の空間で話す], [簡単そう], [必ずしも問題解決の指針を示してくれるわけではない], [心を操る] であった。そして, 【温和】については [やさしい], [落ちついている], [おだやか], [親しみやすい], [あたたかい], [心が広い], [いい人] の7サブカテゴリー, 【心遣い】については [親身になってくれる], [親切], [しっかりしている] の3サブカテゴリー, 【職務上の否定的側面】については [負担], [経済的に不安定] の2サブカテゴリー, 【属性】については [女性], [年上] の2サブカテゴリー, 【職業上の位置づけ】については [学校保健], [心のお医者さん] の2サブカテゴリー, 【よくみる】については [心の機微に敏感], [人を見る目がある] の2サブカテゴリー, 【人付き合い】については [人付き合いが上手], [一線を引ける], [人生経験豊富] の3サブカテゴリー, 【価値がある】については [今の日本に重要な存在], [すばらしい] の2サブカテゴリーが抽出された。上位カテゴリーに分類されなかったサブカテゴリーは [学識], [笑顔], [守秘義務], [遠い存在], [お金がかかる], [苦手], [わからない] であった。

大学生が持つカウンセラーの身だしなみや外見に対するイメージ

カウンセラーの身だしなみや外見に対するイメージに

ついでに自由記述の総回答数は79であった。KJ法の結果をTable 3に示した。

カテゴリーは計6カテゴリーが抽出され, 【清潔感】(34.2%), 【服装】(27.8%) の順に多く, 次に【温和】(16.5%) が多かった。【華美でない】(3.8%), 【髪型】(3.8%), 【化粧】(2.5%) は同程度であった。【清潔感】については [整っている], [清楚], [さわやか] の3サブカテゴリー, 【服装】については [白衣], [スーツ], [医師に近い], [白], [私服], [明るい色], [黒い服] の7サブカテゴリー, 【温和】については [やさしい], [おだやか], [落ちついている], [やわらかい], [親しみやすい], [いい] の6サブカテゴリー, 【華美ではない】については [チャラチャラしていない], [派手ではない] の2サブカテゴリー, 【髪型】については [髪を結んでいる], [黒髪] の2サブカテゴリー, 【化粧】については [化粧がうすい], [化粧に気をつかえる] の2サブカテゴリーが抽出された。上位カテゴリーに分類されなかったサブカテゴリーは [笑顔], [女性], [細身] であった。なお, 大カテゴリーは抽出されなかった。

大学生のカウンセリングの経験

カウンセリング(心理面接)の経験の有無については, “ある”が4名(8.7%), “ない”が42名(91.3%)であった。

カウンセラーに対する知識とイメージの検討

Table 2 カウンセラーに対するイメージの分類結果 (n =95)

大カテゴリー	記述数 (%)	カテゴリー	記述数 (%)	サブカテゴリー	記述数 (%)				
カウンセリング	32 (33.7)	きく	19 (20.0)	話をきく	7 (7.4)				
				聞き上手	5 (5.3)				
				悩みをきく・相談にのる	4 (4.2)				
				傾聴	3 (3.2)				
		共にある	4 (4.2)	4 (4.2)	心によりそう	2 (2.1)			
					味方になる	1 (1.1)			
					向き合う	1 (1.1)			
		働きかけ	4 (4.2)	4 (4.2)	精神的サポート	2 (2.1)			
					心のケア	1 (1.1)			
					アドバイス	1 (1.1)			
					少人数の空間で話す	1 (1.1)			
					簡単そう	1 (1.1)			
					必ずしも問題解決の指針を示してくれるわけではない	1 (1.1)			
					心を操る	1 (1.1)			
					溫和	24 (25.3)	24 (25.3)	やさしい	9 (9.5)
								落ちついている	4 (4.2)
								おだやか	3 (3.2)
		親しみやすい	2 (2.1)						
		あたたかい	2 (2.1)						
		心が広い	2 (2.1)						
		いい人	2 (2.1)						
		親身になってくれる	3 (3.2)						
		心遣い	5 (5.3)	5 (5.3)	親切	1 (1.1)			
					しっかりしている	1 (1.1)			
		職務上の否定的側面	5 (5.3)	5 (5.3)	負担	3 (3.2)			
					経済的に不安定	2 (2.1)			
		属性	4 (4.2)	4 (4.2)	女性	3 (3.2)			
					年上	1 (1.1)			
		職業上の位置づけ	3 (3.2)	3 (3.2)	学校保健	2 (2.1)			
					心のお医者さん	1 (1.1)			
		よくみる	3 (3.2)	3 (3.2)	心の機微に敏感	2 (2.1)			
					人を見る目がある	1 (1.1)			
人付き合い	3 (3.2)	3 (3.2)	人付き合い上手	1 (1.1)					
			一線を引ける	1 (1.1)					
			人生経験豊富	1 (1.1)					
価値がある	2 (2.1)	2 (2.1)	今の日本に重要な存在	1 (1.1)					
			すばらしい	1 (1.1)					
			学識	6 (6.3)					
			笑顔	1 (1.1)					
			守秘義務	1 (1.1)					
			遠い存在	2 (2.1)					
			お金がかかる	1 (1.1)					
			苦手	1 (1.1)					
			わからない	2 (2.1)					

Table 3 身だしなみや外見に対するイメージの分類結果 (n=79)

カテゴリー	記述数 (%)	サブカテゴリー	記述数 (%)
清潔感	27 (34.2)	整っている	8 (10.1)
		清楚	2 (2.5)
		さわやか	1 (1.3)
服装	22 (27.8)	白衣	6 (7.6)
		スーツ	5 (6.3)
		医師に近い	3 (3.8)
		白	3 (3.8)
		私服	2 (2.5)
		明るい色	2 (2.5)
		黒い服	1 (1.3)
温和	13 (16.5)	やさしい	4 (5.1)
		おだやか	3 (3.8)
		落ちついている	2 (2.5)
		やわらかい	2 (2.5)
		親しみやすい	1 (1.3)
		いい	1 (1.3)
華美でない	3 (3.8)	チャラチャラしていない	2 (2.5)
		派手ではない	1 (1.3)
髪型	3 (3.8)	髪を結んでいる	2 (2.5)
		黒髪	1 (1.3)
化粧	2 (2.5)	化粧がうすい	1 (1.3)
		化粧に気をつかえる	1 (1.3)
		笑顔	5 (6.3)
		女性	3 (3.8)
		細身	1 (1.3)

考察

カウンセラーに関する一般的知識

91.3%がカウンセラーを知っていると回答したことから、カウンセラーという職業は大学生にとってよく知られた存在であると言える。KJ法による分類では「カウンセリング」についての知識が大部分であり、カウンセラーはクライアントの話を【きく】、クライアントと【共にある】、クライアントに【働きかけ】を行う職業であり、その領域は「学校」および「医療」の現場であると認識されていることが明らかとなった。

公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会は臨床心理士の専門的活動として、「臨床心理査定（アセスメント）」、「臨床心理面接」、「臨床心理的地域援助」、「研究活動」の4つの専門的業務を挙げている（森田・金子、2014）。

“臨床心理査定（アセスメント）”とは種々の心理テストや観察面接を通して、個々人の独自性、個別性の固有な特徴や問題点の所在を明らかにすること、心の問題で悩む人々をどのような方法で援助するのが望ましいか明らかにすること、他の専門家とも検討を行うことである。“臨床心理査定（アセスメント）”はクライアントに対する介入や支援の方法を決定する上で必要不可欠な専門的アプローチであるが、これらの活動に関連した回答は見られなかったことから、大学生が持つ知識は部分的であると考えられる。“臨床心理査定（アセスメント）”を行っていることについて知識がある場合も、実際にカウンセラーがどのような手法でアセスメントを行っているのかまでは知られていないのが現状だと言えよう。

“臨床心理面接”とはさまざまな臨床心理学的技法を用いて、クライアントの心の支援に資する臨床心理士の最も中心的な専門行為であり、大学生の持つ知識は、こ

の最も中心的な専門行為であるとされる“臨床心理面接”に関することが主であると考えられる。カウンセラーはクライアントの[心のケア]や[精神的サポート]をするために[話をきく],[心によりそう]活動をしていると理解されていると言えるだろう。

“臨床心理的地域援助”は、地域住民や学校、職場に所属する人々(コミュニティ)の心の健康や地域住民の被害克服の支援活動を行うことである。カウンセラーは【広い領域】で活動していると認識されており、臨床心理的地域援助について比較的理解されていると考えられる。一般社団法人日本臨床心理士会(2016)によれば、2015年の時点における臨床心理士の主な活動領域は、教育領域が23.3%、医療・保健領域が28.8%、福祉領域が13.3%、司法・矯正領域が2.8%、産業・労働領域が3.9%、大学・研究所が15.8%、私設心理相談が3.6%、その他が0.8%となっている。本研究では[学校]および[医療]に関する回答が多かったが、実際に教育領域と医療・保健領域で活動する臨床心理士が半数を超えていることから、実情を反映した結果となっている。また、その中でも[学校]現場で働いていると回答した大学生は11.5%と多かった。学校領域で活躍する臨床心理士はスクールカウンセラーであるため、調査参加者である大学生はスクールカウンセラーを想起して回答したと考えられる。スクールカウンセラーはいじめや不登校などの問題に対応するために、1995年に文部科学省のスクールカウンセラー活用調査研究委託事業によって配置された。当時は一部の中学校のみの配置であったが、2001年にはスクールカウンセラー活用事業として制度化されるに至っており、現在はすべての公立中学校とその中学校を拠点として、学区内の公立小学校、公立高等学校にも派遣されている。また、2010年から文部科学省の事業においては直接の対象になっていない私立学校にもスクールカウンセラーを配置しようと、日本臨床心理士資格認定協会は各都道府県臨床心理士会と協力し、私学スクールカウンセラー事業を開始している。このように、スクールカウンセラー制度は学校教育現場に定着したものとなっている。本研究の調査参加者である大学生の平均年齢は20.37歳であり、委託事業から活用事業となった時期が小学校入学時期と重なっている。さらに、2001年からは、日本学生相談学会による大学カウンセラー資格認定制度が運営されており、高等教育機関における学生相談活動も活発に行われている。そのため、スクールカウンセラーや大学カウンセラーは大学生にとって比較的身近な存在であり、カウンセラーに関する知識の基盤につながっていると考えられる。

最後に、“研究活動”とは心の問題への援助を行って

いく上で、技術的な手法や知識を確実なものにするために、基礎となる臨床心理学的調査や研究活動を実施することである。これらについては、職業知識に関する質問には回答が見られなかったものの、カウンセラーに対するイメージに関する質問においては6.3%の大学生が[学識]と回答していたことから、一部ではあるがカウンセラーが研究活動を行っているという知識があることが明らかとなった。

カウンセラーに対する一般的イメージ

大学生はカウンセラーに対して、カウンセラーに関する知識と同様に、クライアントの話を【きく】、クライアントと【共にある】、クライアントに【働きかけ】を行うという「カウンセリング」についてのイメージ、[学校保健]や[心のお医者さん]などの【職業上の位置づけ】をしていることから教育領域や医療・保健領域で活動しているというイメージを持っていることが明らかとなった。

最も多かった回答は【温和】カテゴリーであり、他にも【心遣い】、【よくみる】、【人付き合い】など、カウンセラーの思考や行動というパーソナリティ特性がイメージされていた。イメージされているパーソナリティ特性は[やさしい]、[落ちついている]、[おだやか]、[親身なってくれる]のように肯定的な側面に関するものであった。また、[今の日本に重要な存在]、[すばらしい]といった内容である【価値がある】カテゴリーの回答もあったことから、大学生はカウンセラーを好意的に捉えていることが示唆された。それに対して、少数であるが、[遠い存在]、[苦手]といった、やや否定的な側面に関する回答も得られた。実際に大学生がカウンセラーに出会うことやカウンセリングを経験することは、稀であるため、カウンセラーに対して近寄りたさを持つ者もいると考えられる。

また、[女性]、[年上]といった【属性】に関するイメージが持たれていることも示された。一般社団法人日本臨床心理士会(2016)の臨床心理士の動向調査報告書によると、臨床心理士の性別は男性が22.2%、女性が77.7%であり、女性の方が圧倒的に多い。年齢については、30代が34.7%と最も多く、次いで40代が26.8%、50代が17.9%、60代が9.9%、20代が7.7%であった。このように、実際にカウンセラーは女性が多く、ほとんどの大学生と比べて年上であることから、現状に即したイメージであると言えるだろう。

さらに、【職務上の否定的側面】として、主に収入面について[経済的に不安定]というイメージが持たれていた。国税庁(2015)の平成25年分民間給与実態統計調

査結果によると、年間の平均給与は414万円である。一方、臨床心理士の年収は2015年度の調査結果によると、300万円台が19.0%と最も多く、続いて前後の200万円台が16.5%、400万円台が15.5%となっている（一般社団法人日本臨床心理士会、2016）。したがって、一般的な平均年収と比べて年収が低い臨床心理士が多く、実情を反映したイメージであると考えられる。

カウンセラーの身だしなみや外見に対する一般的イメージ

カウンセラーの身だしなみや外見に対するイメージの中で最も多かった回答は【清潔感】に関するものであった。カウンセラーの専門領域と隣接する医療領域の対人援助職として看護師が挙げられるが、医療現場では援助の対象が病気を持った患者であることから、看護師の身だしなみは安全性や清潔などが優先される（荻・玉谷・岡山、2014）。大谷・杉本・堀川（2010）の看護職と介護職の化粧や身支度に対するイメージの調査では、勤務時の身支度で最も重視されているのは清潔感であることが明らかとなっており、命を預かる患者との間に信頼関係を築くためにも華やかさや流行ではなく、TPOを意識して外見を整える必要があることが示唆されている。このように、カウンセラーには一般社会人として求められる清潔感を越えた、医療従事者としての清潔感が求められている可能性が高い。

【清潔感】と並んで多かった回答は【服装】に関するものであった。[白衣]、[明るい色]などの[白]のイメージ、[スーツ]などの[黒い服]のイメージ、[私服]のイメージの3つが挙げられており、色に関しては白と黒という正反対の色がイメージされていた。[白]は医療領域における白衣のイメージであるため清潔感とつながり、[黒い服]はスーツという一般的な社会人のイメージとつながっていると考えられる。また、[私服]は「きちんとしている」と記述されていたことから、3つに共通するイメージは【清潔感】、【華美ではない】、【温和】であると言えるだろう。【温和】については、カウンセラーに対するイメージとして得られた回答と同様であり、カウンセラーの身だしなみや外見からも[やさしい]、[おだやか]といったパーソナリティ特性がイメージされることが明らかとなった。

最後に、注目すべき点として【化粧】や【髪型】に関するイメージ、[女性]というイメージが回答されていたことが挙げられる。[髪を結んでいる]といった【髪型】、【化粧】についての回答は[女性]であることを前提に記述されており、「華美でない程度にアクセサリや化粧に気をつかえる人」というイメージが抱か

れている。今後は、カウンセラーの身だしなみや外見がどの程度であれば、クライアントが華美ではなく、気をつけていると感じられるのかを明らかにしていく必要があると考えられる。

カウンセリングの経験の特徴

91.3%の大学生はカウンセリング経験がなく、カウンセラーやカウンセリングに対する知識やイメージは持っていないが、実際にカウンセリングの経験がある者は少ないことが明らかとなった。「敷居が高い」といったように[遠い存在]であり、中には[苦手]と感じている大学生も存在したが、「友達がカウンセリングを受けていて良かったと言っていた」といった他者からの肯定的な情報に関する記述や、【温和】に代表されるような肯定的なイメージを持つ大学生が大多数であった。

Corrigan & Watson (2002) は地域住民や精神疾患や精神障害に対する偏見として“Public-Stigma”と“Self-Stigma”の2つの側面があるとしている。地域住民や専門家などの公衆が持つ偏見である“Public-Stigma”により、精神障害者の社会参加への制限が生じること、“Self-Stigma”は精神障害者やその家族が持つ偏見である“Self-Stigma”により、発病後や再発後の精神科受診を遅らせることが示されている。このような根強い精神疾患や精神障害に対する偏見によって、精神科や心療内科への受診やカウンセリングへ抵抗感を持つものは少なくない。しかしながら、本研究ではカウンセリングに対する抵抗感を持つ大学生は少ないことが示唆された。

まとめと今後の課題

本研究の目的は心の問題に対応する専門家であるカウンセラーに対する知識およびイメージを捉えることであった。KJ法によって分類した結果、本研究で示された大学生が持つカウンセラーに関する知識は、臨床心理士の専門的活動である“臨床心理査定（アセスメント）”、“臨床心理面接”、“臨床心理的地域援助”、“研究活動”のうち、“臨床心理面接”や“臨床心理的地域援助”に関するものが中心となっており、カウンセラーは多様な領域でカウンセリングを行う心の専門家であると認識されていると言えるだろう。そして、カウンセラーに対するイメージについては、話をきく、精神的なサポートをするといった具体的な援助内容に関するイメージ、やさしい、落ち着いたといった温和なパーソナリティ特性を持っているというイメージが示された。また、カウンセラーの身だしなみや外見に関するイメージについては、温和なパーソナリティのイメージに加えて、女性であるというイメージを持つ大学生も多く、服装、髪型、

化粧などに清潔感のあるというイメージが持たれていることが明らかとなった。したがって、カウンセラーの身だしなみや外見からもパーソナリティ特性が推測されていると考えられる。このように、相談機関で会おう前から、われわれはカウンセラーに関する知識を有し、さまざまなイメージを形成している。心の問題に対応する専門家であるカウンセラーは、このような知識やイメージがカウンセリングにどのような影響を与えるのかを考えながら援助を行っていく必要があるだろう。

本研究の課題として、調査の対象者が大学生に限られており、得られた知見を一般化することは難しいことが挙げられる。年齢に関係なく、心の問題を抱えて援助を必要とする人が存在することから、幅広い年齢層に調査を行う必要があると考えられる。本研究で明らかとなったカウンセラーに対するイメージは肯定的な側面が目立ったが、異なる年齢層を対象として検討することで、否定的な側面が抽出される可能性がある。また、カウンセラーの知識やイメージを明らかにしたものの、知識やイメージが援助要請行動とどのように関連しているのかは検討されていない。今後は本研究で分類された知識やイメージについて、援助要請行動との関連、その形成過程、カウンセリング経験による変化などの検討が求められる。

引用文献

- 安藤 清志・大坊 郁夫・池田 謙一 (1995). 社会心理学 現代心理学入門4 岩波書店
- Asch, S. E. (1946). Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, *41*, 258-290.
- Corrigan, P. W., & Watson, A. C. (2002). Understanding the impact of stigma on people with mental illness. *World Psychiatry*, *1*, 16-20.
- Fiske, S. T., & Cox, M. G. (1979). Person concepts: The effects of targets familiarity and descriptive purpose on the process of describing others. *Journal of Personality*, *47*, 136-161.
- 萩原 公世・吉川 政夫・山田 寛 (1995). 学生相談のイメージとあり方 ―学生相談室の関する調査・中間報告― 東海大学学生相談室報告, *28*, 120-128.
- 一般社団法人日本臨床心理士会 (2016). 第7回「臨床心理士の動向調査」報告書
- 伊藤 誌菜・松田 康子・加藤 弘通 (2015). 援助要請行動生起における援助要請期待尺度と心理的コストの信頼性・妥当性の検討 子ども発達臨床研究, *7*, 5-12.
- 川喜田 二郎 (1967). 発想法 ―創造性開発のために― 中央公論社
- 木村 真人 (2007). わが国の学生相談に対する援助要請研究の動向と課題 東京成徳大学人文学部研究紀要, *14*, 35-50.
- 国税庁 (2015). 平成25年分民間給与実態統計調査結果 (国税庁ホームページ) Retrieved from <http://www.nta.go.jp/kohyo/press/press/2014/minkan/> (2016年1月8日)
- 公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (2016). 「臨床心理士」資格取得者の推移 (公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会ホームページ) Retrieved from <http://fjcbcp.or.jp/shitokusha/> (2016年4月1日)
- Levinger, G. (1980). Toward the analysis of close relationships. *Journal of Experimental Social Psychology*, *16*, 510-544.
- 真覚 健・中村 雅知 (1993). 学生の相談相手と相談機関のイメージについての調査 東北大学学生相談所紀要, *20*, 11-22.
- 森田 美弥子 (1997). 学生相談室イメージと来談の関係 ―大学生を対象にして― 心理臨床学研究, *15*, 406-415.
- 森田 美弥子・金子 一史 (編) (2014). 臨床心理学実践の基礎その1 ―基本的姿勢からインテーク面接まで― 森田 美弥子・松本 真理子・金井 篤子 (監修) 心の専門家養成講座① ナカニシヤ出版
- 野村 照幸・五十嵐 透子 (2004). 我が国のメンタルヘルス・サービス領域における援助要請行動研究の課題と方向性の検討 上越教育大学心理教室相談研究, *3*, 53-65.
- 荻 あや子・玉谷 奈都美・岡山 加奈 (2014). 大学生が患者の視点で捉えた看護師の化粧に対する評価 岡山県立大学保健福祉学部紀要, *21*, 131-141.
- 大谷 久也・杉本 国子・堀川 悦夫 (2010). 看護職における化粧のイメージ調査 ―年代別による比較― 佐賀女子短期大学研究紀要, *44*, 9-18.
- Secord, P. F. (1958). Facial features and inference processes in interpersonal perception. In R. Tagiuri & L. Petrullo (Eds.), *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford: Stanford University Press.
- 高木 修 (監修) (2001). 大坊郁夫 (編集) 化粧行動の社会心理学 ―化粧する人間のこころと行動― シリーズ21世紀の社会心理学9 北大路書房 (2016年8月26日受稿)

ABSTRACT

Study of knowledge and image of counselors : A focus on appearance and looks

Mariko SHIMIZU and Miyako MORITA

Our research objective was to investigate the knowledge and image of counselors (clinical psychologists) among students. University students ($n=46$) completed a written questionnaire about their knowledge of counseling as an occupation and their image of counselors. The image-related responses we sought focused particularly on appearance and looks. Classification of the results by the KJ method indicated that the majority had knowledge of counseling-related occupational duties and fields of work, that the perceived work of counselors was to listen and provide psychological support, and that the perceived image of counselors was that of a kind, calm, and gentle personality. Responses regarding appearance and looks showed that they had an image of counselors as female, with clean clothing, hairstyles, and makeup. These responses indicated that university students had broad knowledge of counselors and a generally favorable image of their occupation.

Key words: counselor, image, appearance, looks, impression formation